

ヒメガムシとその近似種の学名

佐藤 正孝

日本ではごく普通のガムシの1種にヒメガムシがある。それに近似した別種があるとしたのは中根(1963)で、*S. mergus* REDTENBACHER オオヒメガムシとして原色昆虫大図鑑Ⅱ(甲虫篇)に図示し、国内では沖縄に分布するとした。さらにその処置に当たって WATANABE (1975) は日本産2種の♀交尾器などの形態について報告した。しかし *mergus* そのものは、すでに *rufipes* のシノニムであることが判っている。確かに琉球列島のヒメガムシ類の標本を見る限りでは2種あって、1種は *rufipes* で、他の1種は *mergus* として WATANABE (1975) の扱いは、当時としてはやむを得ない処置といわざるを得ない。しかし筆者は、渡辺氏にいわゆる中根(1963)の *mergus* とは別の種の存在を知らせたりしていた。そのもう1種というのは、亜属を異にする別種で、それに相当する種名は *inconspicuus* を当てるべきであるし、WATANABE (1975) の *mergus* もこの種とすべきと考える。なお、この別亜属である *Neosternolophus* は *Sternolophus* s. str. とは、中・後胸の中央隆起は幅狭く、後胸の棘突起は短く腹部第2節に達しなく、腹部第5節の先端が半月状に切れ込むことなどによって容易に区別がつく。

体下面は別として *rufipes* と *inconspicuus* とは灯火採集で同時に得られ、外見がよく似ているため2種混合であることにほとんど気付かない程である。

どちらかという後者の方が小型でやや幅広い感じであり、個体数が非常に少ないといえる。とすると中根(1963)の図示した *mergus* は、*rufipes* より大型の種で幅広いし、後胸の棘突起が太短く、上翅の点刻列が明らかであるというから、*inconspicuus* とはまったく別の種ということになる。それは図や簡単な記載から判断して、どうも *Sternolophus* 属の種

とは考えにくく、*Neohydrophilus*

属の種である可能性が強い。後者は東南アジアに分布しているが、まだ日本から記録されたことがなく、筆者自身図示された標本を検した訳ではないので、何ともいえないが、一応これまでの学名について、取扱いを整理するとともに、*inconspicuus* に新和名を与え琉球列島から日本新記録種としておきたい。

***Sternolophus*
(s. str.) *rufipes*
(FABRICIUS)**



1. ヒメガムシ *Sternolophus* (s. str.) *rufipes* (FABRICIUS)
2. ミナミヒメガムシ *Sternolophus* (*Neosternolophus*) *inconspicuus* (NIETNER)

ヒメガムシ

Hydrophilus rufipes FABRICIUS, 1792, Ent. Syst., 1: 183 (China).

Sternolophus rufipes: LAPORT DE CASTELNAU, 1840, Hist. Nat. Ins., 2: 54.

Sternolophus (*Sternolophus*) *rufipes*: ZAITZEV, 1909, Rev. Russ. Ent., (3/4), 3: WATANABE, 1975, Annot. Zool. Japon., 48: 134—WATANABE, 1976, Ent. Rev. Japan, 29: 45.

Tropisternus mergus REDTENBACHER, 1844, in HÜGEL. Kaschmir, 4: 514 (Kashmir).

Sternolophus (*Sternolophus*) *mergus*: ZAITZEV, 1909, Rev. Russ. Ent., (3/4): 3.

Sternolophus fulvipes MOTSCHULSKY, 1853, Etud. Ent., 2: 45 (China bor.).

分布: 日本 (本州, 四国, 九州), 琉球列島, 台湾, 朝鮮, 中国, 東南アジア。

Sternolophus (*Neosternolophus*) *inconspicuus* (NIETNER) ミナミヒメガムシ (新称)

Hydrous inconspicuus NIETNER, 1857, Ann. Mag. nat. Hist., (2) 19: 387 (Ceylon: Colombo Lake)

Neohydrophilus inconspicuus: KNISCH, 1924, Coleopt. Cat., 79: 235.

Sternolophus (*Neosternolophus*) *inconspicuus*: D'ORCHYMONT, 1932, Arch. f. Hydrobiol., 9, Suppl.: 705.

Sternolophus brachyacanthus REGIMBART, 1902, Ann. Soc. ent. France, 71: 472 (Ceylon: Puttalam).

Sternolophus (*Sternolophus*) *brachyacanthus*: ZAITZEV, 1909, Rev. Russ. Ent. (3/4): 2.

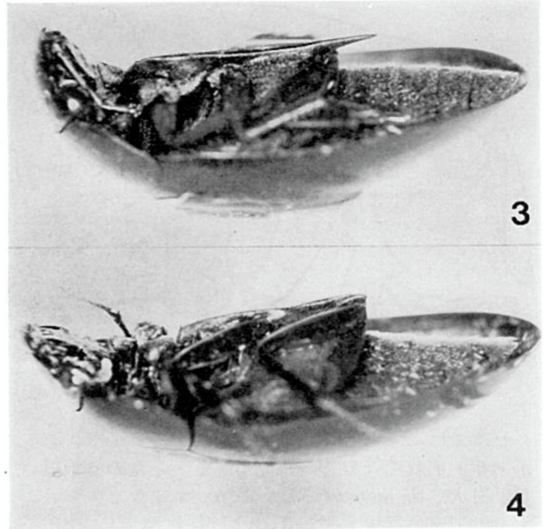
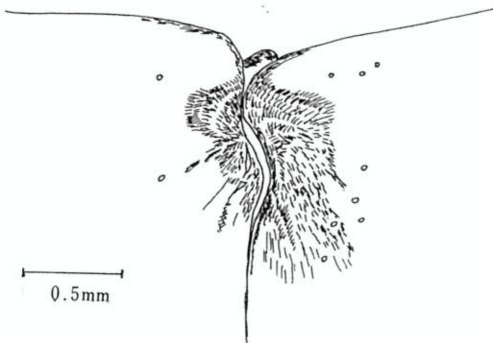
Sternolophus (*Sternolophus*) *mergus*: WATANABE, 1975, Annot. Zool. Japon., 48: 134—WATANABE, 1976, Ent. Rev. Japan, 29: 46. (nec REDTENBACHER, 1844).

分布: 琉球列島, 台湾, 東南アジア。

東南アジアに広く分布する種であるが, 台湾からは YANO et al. (1983 in press) によって記録される予定である。琉球列島でも各島に個体数こそ少ないが与論島以南で得られているので, すでに WATANABE (1975) が *mergus* として石垣島から記録しているとはいえ, *inconspicuus* としてここに改めて記録しておきたい。

○小楯板を欠くサツマウバタムシ

ウバタムシ属 *Chalcophora* の各種は通常小楯板を有しているが, ウバタムシ *C. japonica* (GORY, 1840) のみは例外で, 通常小楯板を欠き, 極めて稀に小楯板を現した個体 (*ab. scutellaris* THÉRY, 1936)



体下側面: 3. ヒメガムシ *Sternolophus* (s. str.) *rufipes* (FABRICIUS). 4. ミナミヒメガムシ *Sternolophus* (*Neosternolophus*) *inconspicuus* (NIETNER)

検視標本: 2 頭, Chabana, Yoron-tô, 10. viii. 1958, S. UENO; 1 頭, Takeda, Ishigaki-jima, 6. vi. 1963, Y. ARITA; 1 頭, ditto, 3. iv. 1968, Y. ARITA; 1 頭, Mt. Omoto-dake, Ishigaki-jima, 1. vii. 1965, Y. HORI; 2 頭, Hegina, Maesato, Ishigaki-jima, 17. vi. 1975, S. KIMOTO; 6 頭, Ohara~Otomi, Iriomote-jima, 30~31. v. 1974, M. SATÔ; 1 頭, Ohara, Iriomote-jima, 18. iii. 1977, Y. HORI; 1 頭, Hateruma-jima, 13, 16. viii. 1968, H. ÔHIRA.

末筆であるが, 標本を恵与された上記諸氏に厚くお礼申し上げる。 (名古屋女子大学)

が発見される。ところが, 過日台湾を訪れた際に埔里の標本商より, ウバタムシとは逆に, 小楯板を全く現さないサツマウバタムシ *C. yunnana formosana* Y. KUROSAWA, 1974, 1 頭を入手したので記録しておく。

1 ♀, 台湾省台中県合望山, 19. v. 1982, 羅綿吉採集。

小楯板は翅鞘会合部の下に存在するが, 小さく, 翅鞘に覆われて背面からは認めることはできない。

サツマウバタムシ *C. yunnana* FAIRMAIRE, 1888 は通常は小楯板を明瞭に現わす種類であるので, 本例はウバタムシ *C. japonica* GORY とは全く逆の珍らしい例と云えるであろう。なお, ウバタムシの小楯板を有する異常型に命名されているので, 本異常型に対して便宜上, *ab. inscutellaris* HATTORI, nov. と命名しておく。

なお, 種々御教示賜った黒沢良彦博士と資料の提供を願った秋山黄洋氏に厚く御礼を申し上げます。

(横浜市中区, 服部宇春)

オニツヤクワガタ属 2 種などの飼育記録

田 中 和 夫

1. スマトラのケバネオニツヤクワガタなど

1979年—80年の2年間、インドネシア・北スマトラ州のメダンで暮した。そこから西へ車で4~5時間行くと Langkat 県下の中央山脈(Bukit Barisan)の縁にオランウータンのリハビリテーションセンターがある。イギリス人の昆虫学者だという Dr. Conrad AVELING がオランダ人の動物学者である奥さんの Rosalind さんと一緒に WWF の援助で不法に捕われたオランウータンを野性に戻す仕事をしていた。ここは自然林の山間に Bohorok 川が流れ昆虫も多いが採集は禁止されている。区域外の Bukit Lawang という橋(海拔 200 m)では採集できる。1979年6月24日、荒木潤氏とこの村へ採集に行き朽木の中から鯉角類の幼虫を沢山捕まえた。メダンの家へ持ち帰ったが、ここは気の効いた飼育用具などが手にはいる様な所ではない。バジャ(市場)へ行って物色して、昔、日本でもよく使っていたアルミのご飯蒸しに眼をつけた。ここでも現地の人が普通に使っているもので粗悪なものであるが安価で、下方 $\frac{1}{3}$ くらいの所に小穴の沢山あいた棚があり、クワガタの飼育にはもってこいのものである。大きさは色々あるが径 25 cm, 高さ 30 cm くらいのものを、その場で水を入れてみて漏らないことを確認の上で買求めた。棚の下に水をたっぷり入れ、上に幼虫のいた朽木をくだいで固く詰めこんだ。朽木に水分を十分与えることがクワガタ飼育の要諦である。この中に捕ってきたものを皆入れて蓋をしておく。はじめに何匹いたか勘定しなかったが7月8日に掘返して調べてみると、クワガタが10匹、ハナムグリが5匹、クロツヤムシの蛹が1匹いた。7月10日

にクロツヤムシの一種 *Macrolinus latipennis* が羽化したのですがすぐに死んでしまった。8月9日から13日にかけて美しいハナムグリが3匹現れた。9月3日と10日にミツホシアカクワガタ *Prosopocoilus occipitalis* の♀が1匹ずつ羽化して出てきた。その後、毎日一度は蓋をあけてみたが何も現れず、何時しか調べることもなくなって月日が経った。翌1980年も終りに近い11月21日、部屋の片隅に忘れさられていたこのご飯蒸しの中でガタガタ大きな音がする。ハッと蓋をとってみると驚いたことに大きなクワガタが活潑に動きまわっている。1年5ヶ月前に入れた小さな幼虫が成長したものにまちがいない。これはケバネオニツヤクワガタ *Odontolabis dalmani* の両歯型の♀であった。採集した時の大きさはせいぜいドウガネカサクラコガネの終令幼虫くらいのもので、このクワガタでは2令と思われる。結局、この種は卵から成虫まで2年近くを要するということであろう。ちなみに気温は室内で一年中26—30°C くらいである。

馴れない熱帯の地ではクワガタムシなどはなかなか見つからないものであるが幼虫は結構とれる。中央山脈の中にある Karo 県の Tonkoh (標高 1500 m) という所で1979年5月24日に朽木の中から採集したものから同年6月23日に *Cardanus* 属の一種が出てきたことも付加しておく。

2. 紅頭嶼(蘭嶼)のオニツヤクワガタ

1982年4月24日、紅頭嶼の山中で朽木の中から大きなクワガタムシの幼虫を採集した。この島から記録のある大形のクワガタはオニツヤクワガタ *Odontolabis siva* だけであるから多分この種であろうと思ったが、念の為生かして持って帰って飼ってみることにした。朽木は現地のものは持って帰れない。幸い研究室の高塚敏裕君の家が椎茸栽培をしているのでホダ木の古いものを持ってきて貰った。

9月になって蒸し器の中の幼虫が活動しなくなっ



1. 羽化出現したスマトラのケバネオニツヤクワガタ(♂)



2. 紅頭嶼産オニツヤクワガタの幼虫



3. 蛹室中の蛹

た様なので 28 日に点検してみると、朽木を固めて大きな蛹室を作っていた。注意して室の壁をけずりしてみると中でもう蛹になっていた。蛹室の内径は長さ 5.9 cm, 巾 3.3 cm, 高さ 3.6 cm であった。この蛹は 10 月 29 日に羽化した。まちがいなくオニツヤクワガタ♀であった。結局蛹期は 31 日 + α である。採集した幼虫は大きな終令幼虫であったので幼虫期は推定できない。成虫は研究室内で砂糖水で飼ったが翌年 2 月 28 日まで 4 ヶ月間生存した。

ところで、紅頭島のオニツヤクワガタは CHŪJŌ (1940) がすでに記録しているし、上記によってこの島に分布していることは間違いない事実である。楨原 (1972) は現地人の採集したものを入手したが、はなはだ疑わしいとしてリストに入れなかった。しかし疑う必要はなかったわけである。本誌前号 (No. 62) で境野、越智 (1983) も本種を落している。

○アカアリツカエンマムシの宿主蟻と生態断片

アカアリツカエンマムシ *Hetaerius gratus* LEWIS は好蟻性甲虫として知られているが、宿主蟻についてはクロヤマアリ (長谷川・久保田, 1944; 黒沢, 1976; 田野口・小塩, 1979) とツノアカヤマアリ (田野口・小塩, 1979) の記録のみである。

筆者はハヤシクロヤマアリとアカヤマアリの巢中より採集したので報告する。蟻を同定していただいた久保田政雄氏に厚く御礼申し上げる。

1. ハヤシクロヤマアリ *Formica* sp.

2 頭, 神奈川県西丹沢 西沢, 3. v. 1983.

1 頭, " 箱根 宮の下, 9. v. 1983.

2. アカヤマアリ *Formica sanguinea* SATREILLE

1 頭, 長野県姫木平, 22. v. 1983.

本種はいずれも、石下に営巣しているものの中から得た。西丹沢の例では沢に沿った荒地状の開けた所で、石を起こすとハヤシクロヤマアリが営巣しており、その中に蟻が死んでバラバラになっていたところに赤いエンマムシを発見した。それが、アカアリツカエンマムシであった。他の例もほぼ同様で、蟻の死骸のそばから得たので、アリを食していたのではないかと想像する。採集時期については黒沢 (1976) が述べている通り、4 月下旬から 5 月中



4. 羽化したばかりの成虫 (♀)

黒沢博士の談によると科学博物館のコレクションの中にも紅頭島のオニツヤクワガタがあるとのことである。終りに、紅頭島採集の機会を与えられた帝装化成社長鈴木静生氏と、オニツヤクワガタの飼育を担当してくれた田形和弘・高塚敏裕両君にお礼申し上げる。

引用文献

CHŪJŌ, M., 1940, Contribution to the Coleopteran fauna of Kô-tô-syo (Botel-Tobago Is.), Formosa. *Trans. nat. Hist. Soc. Formosa*, 30 (196): 8—13.

塚原 寛, 1972, 鹿児島大学生物研究会台湾甲虫採集目録. 台湾遠征報告書〔甲虫編〕: 1—56.

境野広行・越智輝雄, 1983, コウトウチビクワガタについて. 甲虫ニュース, 62: 1—2.

(東大医科研・帝装化成虫害研)

旬 (寒冷地の場合は遅くなる) が最適のようで、それは石下に営巣する時期と一致し、それ以降は蟻が地中に降下するため、採集が困難となる。

なお、分布については原記載の産地が下諏訪～和田峠であり、会津若松 (黒沢)、横浜 (長谷川・久保田)、小田原 (平野)、富士山 (田野口・小塩)、福智山 (高倉) 等であり、本州、九州ということになるが、かなり広範囲に分布しているものと思われる。

(神奈川県小田原市, 平野幸彦)

○ヒサゴホソカタムシの記録

ヒサゴホソカタムシ *Glyphocryptus brevicollis* SHARP, 1885 の分布記録は、佐々治寛之博士の「日本産甲虫目録 No. 13 ホソカタムシ科」(1977) によれば、九州、対馬、三宅島であり、他に筆者の知る限りでは岡山県南部、長崎県五島列島中通島があるが、いずれにしても記録の少ない種類である。

筆者は下記の通り東京都と神奈川県で本種を得ているので記録しておきたい。

1 頭, 東京都町田市図師, 24. vi. 1980, ヒトククタケより採集した; 2 頭, 神奈川県津久井郡城山町風間, 8. viii. 1983, 共にコナラの枯枝をピーティングして得た。最後に一部同定をお願いした平野幸彦氏にお礼申し上げる。(神奈川県川崎市, 沢田和宏)

台湾から採集されたクシヒゲハネカクシについて

日本産クシヒゲハネカクシ属 (ハネカクシ科, ハネカクシ亜科, *Quediini* 族) を調べている最中に、台湾から採集されたクシヒゲハネカクシを検することができたので報告したい。

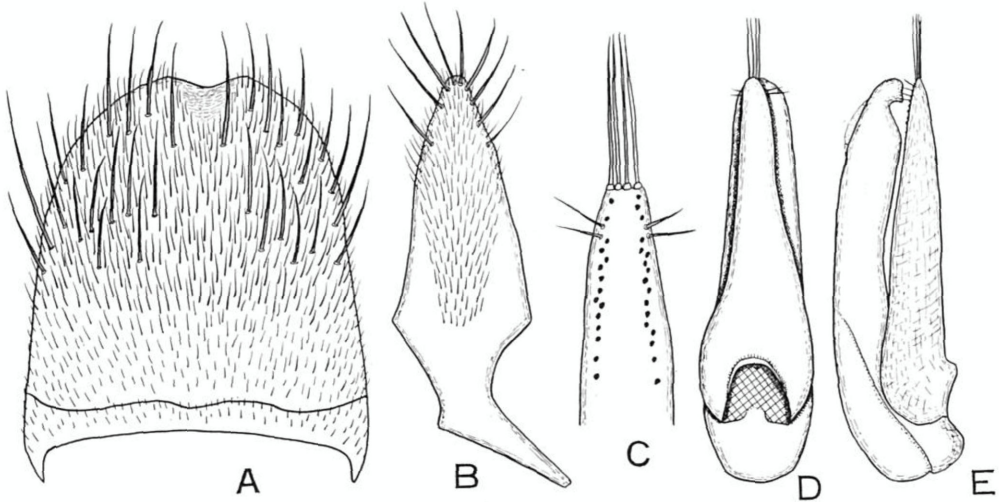
Velleius pectinatus SHARP, クシヒゲハネカクシ, 1 ♂, 台湾南投県南山溪, 6. v. 1977, 新里達也採集。本種はスズメバチの巣に入り、その幼虫、蛹を食することで有名なハネカクシであるが、これまで台湾より記録のないものである。本個体は上翅 (縁を含めて) が非常に黒く、光沢があまりないことにより日本産の個体と異なった感じがして最初は新種だと考えていたが、雄交尾器を検したところクシヒゲハネカクシであることがわかった。

雄の第8腹板 (図, A) は先端半分に15~16対の剛毛を有し、前縁中央に浅い切れ込みがある。雄の

第9腹節腹板 (図, B) は先端に9, 10本の剛毛がある。基部は右に曲がり、非相称である。雄交尾器 (図, C-E) はよく硬化して、比較的細長く、ほぼ左右相称である。中央片 (Median lobe) の基片 (basal piece) は比較的小さい。中央片の先端片 (apical lobe) の腹面先端部は側方から見ると強くえぐれる。側片 (paramere) は先端片の長さとはほぼ等しい。側片先端前縁に平行して走る長い4本の剛毛があり、先端両側に2対の比較的短い剛毛及び1対の感覚小突起列がある。その1列は15~17個の円形小突起からなる。

文末になるが本種の採集者である新里達也氏に厚くお礼申し上げる。

(九大農昆虫, 直海俊一郎)



クシヒゲハネカクシ A: 第8腹節腹板(雄); B: 第9腹節腹板(雄); C: 雄交尾器側片(下面); D: 雄交尾器(腹面); E: 雄交尾器(側面)。

○ゴモクムシの和名

Harpalus sinicus sinicus HOPE と *H. niigatanus* SCHAUBERGER は共に各地で普通にみられるゴモクムシである。これらのゴモクムシを同定する際には、Fauna Japonica, Harpalini (1973) や原色昆虫大図鑑II (北隆館)などの文献が参照される事が多い様である。ところがこれらの文献の中で「キアシクロゴモクムシ」という和名が前記の両種にそれぞれ用いられている。そのため和名だけ用いて起こる混乱を避けるためにもここで整理しておきたいと思う。

Harpalus sinicus sinicus HOPE

Fauna Japonica: キアシクロゴモクムシ

原色昆虫大図鑑: ウスアカゴモクムシ

H. niigatanus SCHAUBERGER

Fauna Japonica: クロゴモクムシ

原色昆虫大図鑑: キアシクロゴモクムシ

以上の様に共通のキアシクロゴモクムシという和名を消し、*H. sinicus sinicus* に対してウスアカゴモクムシを、*H. niigatanus* に対してはクロゴモクムシを用いるのがよいと思う。

(東京都港区, 森田誠司)

○アサヒナルリナガタマムシの記録

アサヒナルリナガタマムシ (*Agrilus asahinai pseudorotundicollis* Y. KUROSAWA) は京都, 滋賀, 岐阜の各県より, ごくわずかの採集例が報告されているにすぎない。最近, 斉藤秀生氏より頂いたタマムシの中に福井県産の本種を見出したので記録しておくと共に同氏に厚く御礼申し上げる。

1 ♀, 福井県敦賀半島馬背峠, 18. v. 1982, 斉藤秀生採集。(兵庫県西宮市, 遠山雅夫)

○福島県磐城市江田周辺のゾウムシ類
(ゾウムシ類分布資料 1)

我国におけるゾウムシ類の採集記録は非常に少ない。したがって我が国のゾウムシ相の解明のためには、断片的ではあっても分布資料の蓄積が望まれる。そこで筆者は分布状態把握の一助として、今後断片的ではあるが各地のゾウムシの採集標本を種名の判明したものについて記録してゆきたいと考える。

なおこのシリーズの報告にあたり、ゾウムシ類の同定や分布等で御教示下さっている森本 桂博士に感謝の意を表する次第である。

福島県磐城市江田は、カミキリムシの好採集地として知られており、筆者は 1980 年 7 月 23 日と 24 日にゾウムシ類の採集調査を試みたので、ここにその結果を報告する。

オトシブミ科 Attelabidae

1. ゴマダラオトシブミ *Paroplapoderus pardalis* VOLLENHOVEN, 1 頭。
2. ヒメクロオトシブミ *Apoderus erythrogaster* VOLLENHOVEN, 15 頭。
3. ナラルリオトシブミ *Euops phaedonia* SHARP, 1 ♂ 1 ♀。
4. カシリオトシブミ *Euops splendida* VOSS, 3 頭。
5. ルイスアツナガオトシブミ *Henicolabus lewisii* SHARP, 1 頭。
6. ルリホソチョッキリ *Eugnamptus amurensis* FAUST, 1 頭。
7. ルリイクビチョッキリ *Deporaus mannerheimi* HUMEL, 1 頭。

ヒゲナガゾウムシ科 Anthribidae

8. アカアシヒゲナガゾウムシ *Araecerus tarsalis* SHARP, 2 頭。
9. マダラヒゲナガゾウムシ *Paramesus tessellatus* BOHEMAN, 2 頭。
10. ウスモンツツヒゲナガゾウムシ *Ozotomerus japonicus* SHARP, 1 頭。
11. シロヒゲナガゾウムシ *Platystomus sellatus* ROELOFS, 1 ♀。
12. シリジロヒゲナガゾウムシ *Androceras flavellicornis* (SHARP), 3 ♀♀ 2 ♀♀。
13. キマダラヒゲナガゾウムシ *Tropideres naevulus* FAUST, 1 頭。
14. エグリヒゲナガゾウムシ *Gibber incisus* (SHARP) 1 頭。

ゾウムシ科, Curculionidae

15. カナムグラサルゾウムシ *Ceutorhynchus shawouensis* VOSS, 10 頭。
16. ツヤケンヒメゾウムシ *Didotthis melancholica* ROELOFS, 2 頭。
17. *Psilarthrus* sp. 25 頭。
18. ノコギリクモゾウムシ *Mecopomorphus griseus* HUSTACHE, 1 頭。
19. ハコベタコゾウムシ *Hypera mongolica* MOT-

- SCHULSKY, 1 頭。
20. カシワクチブトゾウムシ *Myllocerus griseus* ROELOFS, 3 頭。
21. チビヒョウタンゾウムシ *Myosides seriehispidus* ROELOF, 8 頭。
22. ケナガスグリゾウムシ *Callirhopalus setosus* ROELOFE, 3 頭。
23. ホホジロアツナガゾウムシ *Mecyslobus erro* PASCOE, 1 頭。
24. イチゴハナゾウムシ *Anthonomus bisignifer* SCHENKLING, 1 頭。
25. マダラメカクソゾウムシ *Mecistocerus nipponicus* (KONO), 2 頭。
26. *Syrotelus* sp., 4 頭。
27. *Rhinomerus* sp., 1 頭。
28. ナガカツオゾウムシ *Lixus depressipennis* ROELOFS, 3 頭。
29. ウスモンカレキゾウムシ *Acicnemis palliata* PASCOE, 1 頭。
30. マツキボシゾウムシ *Pissodes nitidus* ROELOFS, 1 頭。
31. ホソアナアキゾウムシ *Hylobius elongatus* ROELOFS, 1 頭。
32. ツツゾウムシ *Carcilia tenuistriata* HELLER, 3 頭。
33. フタキボシゾウムシ *Lepyrus japonicus* ROELOFS, 2 頭。

(和歌山県有田郡, 的場 績)

○北海道霧多布のミズギワゴミムシ (ミズギワゴミムシ分布資料 4)

筆者は 1982 年夏、北海道東部の霧多布～琵琶瀬の海岸でゴミムシ類の採集を行なった。主に砂浜に打ち上げられた海藻や流木の下などから得られたミズギワゴミムシ類を分布資料として報告する。

北海道霧多布～琵琶瀬, 19. viii. 1982, 筆者採集。

1. メダカチビカワゴミムシ *Asaphidion semilucidum* (MOTSCHULSKY) 17 頭。
2. カギモンミズギワゴミムシ *Bembidion (Peryphus) captivorum* NETOLITZKY 7 頭。
3. オオズミズギワゴミムシ *B. (Limnaeoperiphus) quadriimpressum* (MOTSCHULSKY) 230 頭。
4. アオヘリミズギワゴミムシ *B. (Chlorodium) leucolenum* BATES 2 頭。

本種は原色昆虫大図鑑 II (北隆館)によると本州及び九州に分布するというが、既に北海道(井上, 1955)と四国(河野, 1968)からも記録されている。

(東京都港区, 森田誠司)

甲虫ニュースの発行が遅れて申し訳ありません。次号は編集途中で 4 月にはお届けできる見込です。そして年内には予定通り 4 月号を発行したいと存じますので、積極的なご投稿をお願い致します。

日本初記録の *Phymatodes* 属のカミキリムシ

Phymatodes (Phymatoderes) lividus (Rossi) は、北アフリカからヨーロッパにかけて分布しているとされていた種であるが、筆者は山梨県甲府市産の本種と思われる標本を検したので報告する。

1♂、山梨県甲府市武田 (300 m)、16. v. 1982、池田一穂採集、筆者保管。

この個体は、甲府の市街地にある山梨大学の官舎の庭で、午後4時頃に飛翔中を捕えたもので、筆者も生きて動いているのを確認している。この官舎の庭から10 mも離れていない所に八幡神社の森があり、市街地としては比較的良好に自然が残されている。筆者は、本種を採集後この神社の森で一週間余り、午後4時前後に1~2時間の採集を試みたが、

採れたのはチャイロホソヒラタカミキリばかりで、本種の追加採集はできなかった。なお、外国産木材等の貯木場は近くには全くない。

本種はチャイロホソヒラタカミキリと同じようにさやばねの色に茶色のものと青色のものがあり、今回採集されたものは青色のものであった。手元にあるアルジェリア産の標本と比べても、外見上は有意の差異を見出し得なかった。本種は一見チャイロホソヒラタカミキリの小型個体に似ているが、次の諸点で容易に区別できるので、まぎらわしい標本をおもちの方は注意して頂きたい。

触角は太い。前跗節第1節は第2節よりはるかに長く、跗節第1節の長さ≒第2節+第3節。

.....*Phymatodes testaceus*

触角は細い。前跗節第1節は第2節よりわずかに長く、跗節第1節の長さ×1.5≒第2節+第3節。

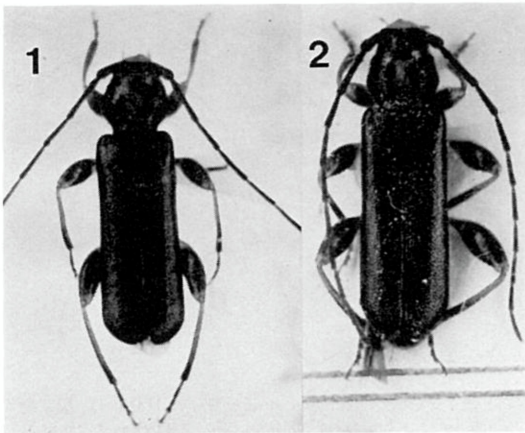
.....*P. lividus*

VILLIERS (1978) は、本種を含むいくつかの種を *Phymatoderes* 属 (type, *P. pusille*) として独立させているが、通常は *Phymatoderes* は *Phymatodes* の亜属として取扱われているようである (ex. HARDE, 1966)。今回の記録は、本亜属の日本からの最初の記録ともなる。未筆ながら、本種を採集され、貴重な標本を恵与された池田一穂氏に感謝の意を表したい。

参考文献

HARDE, K. W., 1966, Die Käfer Mitteleuropas, 9: 60-61. GOECKE & EVERS, Krefeld.

VILLIERS, A., A., 1978, Faune des Coléoptères de France I: 356-357. Editions Lechevalier, Paris. (山梨大教育, 池田清彦)



Phymatodes lividus (Rossi)

1. 甲府市産. 2. アルジェリア産.

○タイナンバラスタシアコガネの生態について

Parastasia 属のコガネムシは比較的採集が難しく、その多くは朽木中より採集されることが多い。そのため *Parastasia* 属の生態に関してはほとんど未知であり、報告も見られない。

筆者は今年の夏、台湾においてタイナンバラスタシアコガネ *Parastasia canaliculata* WESTWOOD を採集する機会に恵まれたが、その際に興味深い生態を観察したのでここに報告する。

北港溪の川原において、砂州の上に捨てられたナンの実 (観光客の食べ残りと思われる) の中に、タイナンバラスタシアコガネの成虫2♂♂1♀が潜り込み食していた。このナンの実は発酵しており、シヨウジョウバエが多数集まっていたもので、タイナンバラスタシアコガネ3頭のうち2頭は完全にナンの実の中に潜っている状態であった。なお、本年は天候不順のため近くのナン畑では実がなっておらず、例年ナンの実が集まるタイワンシロテンハナムグリ *Protactia inquinata* ARROW 等の発生数も少なかったことを付記する。

未筆ながら、種々ご教示いただいた石田正明先生に深く感謝する。(神奈川県海老名市, 和田 董)

○海外からのエンマムシ移入例

交通機関や貨物により海外から昆虫が移入した例は多く知られているが、それらは害虫であるために報告される場合が多く、捕食性の昆虫の記録は少ないようである。筆者の手元に輸入木材に付着していた下記のエムマムシがあるので紹介しておく。なお、同定は久松定成氏にお世話になった。

Cylister oblongus (FABRICIUS, 1792)

1981年7月7日にソビエト連邦ナトカ港から新潟県上越市の直江津港に輸入された木材 (Larch wood) に付着していた1個体である。本種はヨーロッパからシベリアにかけ広く分布する種類であるが、日本には分布しない。

標本は元横浜植物防疫所直江津出張所の佐藤 勉技官の採集である。標本を恵与され発表をゆるされた同氏と吉岡健一郎所長、同定をお願いした久松定成氏に厚くお礼申し上げる。(小樽市, 楠井善久)

○ミナミカワクロモリヒラタゴミムシの分布記録と雄について

ミナミカワクロモリヒラタゴミムシ *Agonum* (*Nipponagonum*) *minamikawai* HABU, 1959* は、静岡県安倍峠産の 3 頭の雌に基づいて記載され、その後、山梨県二軒小屋産の 1 雌が追加記録されたが、(HABU, 1978**)、雄は未知のままになっている。筆者の手元には、本種の雄を含む数頭の標本があるので、分布資料として報告し、あわせて雄の交尾器を図示しておく。

1 ♂, 山梨県北岳大滝沢, 24. vii. 1975, 筆者採集; 1 ♂, 山梨県北岳広河原, 10. vii. 1977, 筆者採集; 1 ♀, 山梨県塩山市日川溪谷, 28. vi. 1981, 池田清彦採集; 1 ♂, 1 ♀, 東京都奥多摩町小川谷, 31. v. 1983, 筆者採集。

本種は、紀伊半島などに多いコモリヒラタゴミムシ *A. (N.) amphinomus* (BATES) に似ているが、前胸背の後角が角ばり、翅鞘に金属光沢がある。後者の後角は丸く、翅鞘は弱い虹状光沢のある黒色で識別は容易である。雄交尾器陰茎は、後者 (図 2. a) のように強く彎曲しない (図 1. a)。先端片と側片の形は似ている。

北岳産の 2 ♂ は、ピーティングにより得られた多数のムラサキモリヒラタゴ

ミムシ、ベントンモリヒラタゴミムシに混っていたもので、体長 9.5 と 10 mm、体幅 3.7 と 4 mm。奥多摩産は溪畔林の石下より雌雄同時に得たものである。体長 8.3 mm、体幅 3.4 mm で、やや小型の個体であった。いづれの産地でも個体数は少ないようである。

末尾ながら貴重な標本を恵くださった山梨大学の池田清彦博士、ならびに、比較にもちいた三重県産のコモリヒラタゴミムシを恵くださった農林水産省野菜試験場の西田 宏氏に厚くお礼申し上げる。

*HABU, A., 1959. *Kontyû*, 27: 221-223.

**——, 1978. *Fauna Japonica. Carabidae; Platynini*: 152. (千葉県船橋市, 笠原須磨生)

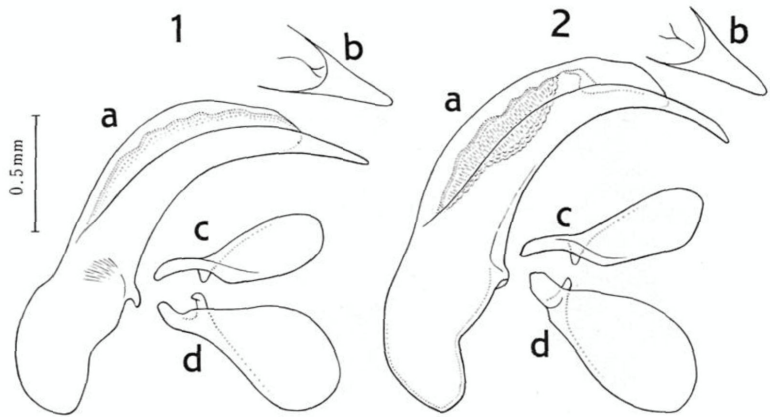


図 1. ミナミカワクロモリヒラタゴミムシ *Agonum minamikawai* HABU [山梨県北岳産]; 図 2. コモリヒラタゴミムシ *A. amphinomus* (BATES) [三重県高見山産] a. 交尾器陰茎左側面; b. 先端片上面; c. 右側片; d. 左側片。

○神奈川県大磯町でトガリホソアトキリゴミムシを採集

トガリホソアトキリゴミムシ *Philorizus optimus* (BATES) は、長崎が原産地で採集例は少なく、関東地方では千葉県房総半島南端の洲崎に記録 (奥村・河合, 1974) があるのみと思われる。今回採集した個体は未成熟であったが、畑のへの林の崖で下草をピーティングして得たものである。

1 ♀, 神奈川県大磯町国府本郷, 5. v. 1983, 和泉敦夫採集。

文末ながら、同定の労をとられ発表を勧めて下さ

った笠原須磨生氏に心よりお礼申し上げます。

(東京都大田区, 和泉敦夫)

甲虫談話会

会費 (一ケ年) 2000 円, 次号は 2 月 29 日発行予定。

投稿〆切は 1 月 1 日

発行人 黒沢良彦

発行所 甲虫談話会 東京都台東区上野公園

国立科学博物館動物研究部内

電話 (364) 2311, 振替東京 0-60664

タツミの昆虫採集器具

ドイツ型標本箱 木製大 ¥5,000, 桐合板製インロー型標本箱中 ¥1,700, 送料一箱につき都内及第一地帯: 3 個以下 ¥1,300, 4 個以上 ¥850 (以下同様), 第 2 地帯 ¥1,500, ¥950, 第 3 地帯 ¥1,700, ¥1,050, 其他, 各種器具, 針などを製作販売しています。カタログを御請求下さい。(¥60)

タツミ製作所

〒113 東京都文京区湯島 2-212-25
電話 (03)811-4547, 振替 6-113479

昆虫の器具は「志賀昆虫」へ

日本ではじめてできた有頭昆虫針!!

1, 2, 3, 4, 5 号 (各号 100 本 180 円)

なお、有頭針 00, 0 号もできました。その他、採集、標本整理用各種器具も取揃えてあります。

〒150 東京都渋谷区渋谷 1 丁目 7-6

電話 (03) 409-6401 (ムシは一ばん)

振替 東京 21129

志賀昆虫普及社